

ゆずの話

小川未明

青空文庫

お父さんとうの、大事だいじになさっている植木鉢うえきばちのゆずが、今年ことしも大おおきな実みを二つつけました。この二つは、夏なつのころからおたがいにきようそう競争きようそうしあつて、大おおきくなるうとしていましたが、二つとも大おおきくなれるだけなつてしまふと、こんどは、どちらが美うつくしくなれるかといわぬばかりに、負まけず劣おとらずにみごとな色合いろあいとなりました。

年雄としおくんは、これを見みると、なんとということなく悲かなしくなるのです。そして、ぼんやりと遠とおい過ぎ去さつた日ひのことを考かんえるのでありましたけれど、考かんえても、まだ小ちいさかつた日ひのことは、はつきりとわかりません。ちようど、庭にわを照てらしている初冬しよとうの弱よわい

光ひかりのように、ところどころ夢ゆめのような記憶きおくに残のこっているばかりでした。ただ、その日ひのことをお父とうさんや、お母かあさんから聞きいて、「ああ、そうであつたか。」と、思おもうばかりでした。その日ひのことというのは、やはり、こうした寒さむい、さびしい日ひのことでした。兄にいさんと二人ふたりは、お縁えんがわ側あそで遊あそんでいました。そこには、このお父とうさんの大だい事じになされているゆずの植う木えき鉢ばちが、置おいてあつて、しかもたつた一つ大おおきい実みが、枝えだになつていたのであります。

このとき、兄にいさんは七しちつで、年雄としおくんは五ごつでした。

「僕ぼく、このゆずがほしいな。」と、年雄としおくんはいいました。

「それは、たべられないのだよ。」と、兄にいさんが、いいました。

「おいしくないの?」

「ああ、すつぱくて、たべられないのだ。」

兄にいさんは、そう返へんじ事じをして、うしろを向むいて、おもちゃの汽き車しゃを走はしらせていました。

「ポオー、うえの、うえの、ポオー、あかばね、あかばね——。」

そのうちに、汽き車しゃはひっくりかえりました。

「年としちゃん、汽き車しゃがてんぷくしたよ、たいへんだからきておくれよ。」と、兄にいさんは、弟おとうとの年とし雄おくんを呼よびました。けれど、返へんじ事じがありません。遊あそびに気きを取とられて、弟おとうとがなにをおしているかも知しらなかつた兄にいさんは、はじめに弟おとうとの方ほうに目めを向むけたのでした。そして、なにを発はっ見けんしたでしょうか。

「あつ！」と、兄にいさんは、その瞬しゆん間かんおどろきの目めをみはった

のです。

「年ちゃん、ゆずをもいでしまったのかい？」

兄さんは、弟が、ゆずを持って、うれしそうにながめているのを見みると、そばへ走ってきました。

「たいへんなことをした。お父さんにしかられるよ。」と、兄さんはいいました。

こう、いわれると、さすがに、年雄くんの顔にはいままでの明るい、うれしそうな色は失せてしまって、急に悲しそうな泣き出しそうな顔つきとなりました。

やさしい兄さんは、これをおもったのでしよう。

「いいよ、年ちゃんは、知らなかったのだから……。」

そういつて、自分じぶんが、枝えだからはなれたたゆずを手てに持もつて、それがついているときのようえだに枝えだへつけて見みていたのでした。

「たいそうおとなしいのね。そこで、二人ふたりはなにをして遊あそんでいきますか。」と、お母かあさんが、入はいついたらつしやいました。すると、ふいに兄にいさんは泣なき出だしました。つづいて年雄としおくんも泣なき出だしました。

「だれです、ゆずをとつたのは？」

お母かあさんは、目めをまるくなさつて、大おおきな声こえで叫さけばれました。

茶ちやの間まで、新しん聞ぶんを見みていらしたお父とうさんが、これをききつけ、

「なに、ゆずをもいだ？」といつて、足音あしおと荒あら々あらしく、縁側えんがわ

へ出てこられると、怖ろしい目で、にらみつけて、
「おまえか？」と、ゆずを持つている、兄さんの頭をパチパチと
なぐられました。

「わるいいたずらをするやつだ、せつかく大事にしているものを
」。

お父さんは、顔を真っ赤にして、怒られたのであります。

このとき、兄さんは、なぐられながら黙っていました。年雄く
んは、ただ怖ろしいので、小さくなって、ふるえていました。そ
して、兄さんがしたのでないことは、その後になって、年雄くん
の口からわかったのです。

「ああ、そうだったか。」と、お父さんは、はじめてやさしい兄

さんの心持ちを知つて、自分のしたことを後悔なされました。このやさしい兄さんは、その翌年の春、疫癘を患つて、わずか一日で死んでしまつたのでした。

年雄くんは、いつしか兄さんの年となりました。いま、一人で、ゆずの実を見て、やさしい兄さんのことを思い出していたのです。いいお天気でした。お父さんは、庭へ出て、倒れかけたコスモスに竹を立てて、起こしていらつしやいました。やがて、年雄くんのいる縁側へきて、お父さんは、腰をおかけになりました。「おお、いい色になつたな。」と、お父さんは、ゆずをぐらんになつていました。

「年や、あすこにあるはさみをもつておいで。」と、お父さんは、

おっしやいました。年雄としおくんは、さつそくはさみを持もつてきて、お父とうさんに渡わたしながら、

「なにをなさるの？」と、ききました。

「きつて、ほとけ仏ほとけさまに上あげるのだ。」

ゆずを見みて、お父とうさんも、やさしい兄にいさんのことを、思おもい出だしなされたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「ゆずの話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ゆずの話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>